夏

地球の歴史から考えれば、変化も致し方ないのだろうか。昔ほど四季の区別がはっきりしなくなったような気がする。冬にポカポカ陽気になったり、春に雪が降り夏が来ないうちに秋になったり。にもかかわらず、暦だけは確実に四季を呼び寄せる。

今年も夏がやってきた。やはり夏には夏の風情を求めてしまう。

夏を連想させるもの？

アサガオ、ひまわり、スイカ、カキ氷、蚊取り線香、風鈴、カミナリ、夕立、蚊帳などなど数々あるが、人によって、時代によってはもっと異なる発想があるかも知れない。最後の蚊帳は知らない人も増えた。衛生状態が良くなり蚊が減ったこともある。日常生活の必需品だった蚊帳が姿を消してからなり久しい。

幼い頃、蚊帳の中に入ると自分だけの空間が出来たようでとてもワクワクした。私よりずっと年上の方にいわせれば別のワクワク感があったようだ。

〃カミナリさんは粋なお方よ

戸を締めさせて

二人しっぽり

蚊帳の中〃

この時代に浸っていた人たちだ。

私の中では、蚊帳からさらに連想すると、そこに蛍が出てくる。蛍を捕まえ吊った蚊帳の中に放す。蚊帳はたちまち立方体の大きな虫かごになった。

最近は、人工的に蛍の生息場所を設ける地域が増えている。

逆にいえば、そうでもしなければなかなかお目にかかれなくなったからだろう。環境変化は生態系に大きな影響を与える。

蛍は1年かかって羽化し、僅か1、2週間前後で一生を終える。

「泣かぬ蛍が身を焦がす」のごとく、はかない命を短い最終コーナーで燃やし果てる。

6月中旬から7月中旬くらいが見ごろといわれるが、子供の頃、夏休みそれもお盆の頃に蛍狩りしたように思うのだが、記憶違いだろうか。今は残念ながら、身近ではなかなかあの光を見ることは出来ない。

ところが、ところがである。

私は蛍を見つけたのだ。それも八月に、である。稲葉に乗ってきらりと光る蛍を見つけた。愛犬と散歩したとき見つけた。朝六時、夏の朝陽はすでに山の上。朝陽に向かって歩く田んぼ道。実り始めた稲穂を支えるように成長した稲葉で、田は埋め尽くされた。緑の葉は微かに揺れている。その揺れに合わせるように、蛍の光も揺れていた。立ち止まり腰をかがめると、その光はどこかに隠れた。また歩き出す。確かに光っている。蛍だ。消えた蛍がいた。それも夜の蛍が朝光っている。暗闇で見る光り方とは異なり、見る角度によって輝きが色鮮やかに変化した。

朝陽に向かって立ったとき、夜に見るグリーン色ではないが、それは間違いなく無数の蛍となった。

私はそれを「露蛍（つゆボタル）」と名づけた。